

「ノコト目的語」におけるコトの分析

—必須のコトから介在可能なコトへの連続性—

湯本 かほり

キーワード： ノコト目的語、必須のコト、介在可能なコト、有情性、非有性化

1. はじめに

本研究ではコトを底名詞とする目的語を「ノコト目的語」と称する。この「ノコト目的語」においては述語によってコトが必須となる場合と介在が可能となる場合がある。

- (1) 太郎が花子（ノコト/* ϕ ）を話している。
- (2) 太郎が花子（ノコト/ ϕ ）を愛している。
- (3) 太郎が花子（ノコト/ ϕ ）を殺した。

(1)は述語からの要求により、目的語においてコト化つまり抽象化した名詞句を必要とするためにコトが必須となる。一方、(2)(3)において述語は本来抽象名詞を要求しない。にもかかわらず、コーパスなどでは(2)(3)のような例がみとめられる。本研究は、必須のコトと介在可能なコトを連続的なものとして考え、その連続性をとらえる。そして、主に介在可能なコトについて先行研究における記述を見なおし、改めて現象を観察したうえで以下のことを主張する。

- I. 介在可能なコトは先行名詞句について「特定性」よりも「有生性」の制約を強く示す。また、場所名詞をとれることから、更に「有情性」の制約が働いている。
- II. 基本的に表層上の目的語の位置にしか現れない (cf. 笹栗 1999、田窪 2010)。
- III. I, IIより介在可能なコトの機能は有生名詞目的語の「非有生性」が主たる機能である。

以下、便宜上、必須のコトをコト、介在可能なコトをコトと表記し分ける。また、必須のコトを伴う目的語をノコト目的語、介在可能なコトを伴う目的語をノコト目的語と表記し分ける。

2. 先行研究とその問題点

2.1 先行研究概観

コトを対象とした先行研究は必ずしも多くない。金(1994)では、「誤用なのか、最近の傾向なのか判断できない(p.9)」と述べられ、母語話者のなかには(3)のような例文について全く許容できないインフォーマントもおり、例外的な用法とされることもある。

ここでは、コトを取り上げている先行研究として、笹栗(1999)、また方言研究の観点から分析した日高(2006)を概観する。

2.1.1 笹栗(1999)

笹栗(1999)では、ノコト目的語が受動文の主語にならないことから、介在可能なコトは必須のコトとは異なるということを指摘した。

- (4) a. 花子が太郎に愛されている。
b. *花子のコトが太郎に愛されている。

また、以下の例を挙げ普通名詞にコトがつかないことや、(6)の例についてコトを付与することによって、「特定の花嫁」の解釈が生じることから、前接名詞に特定性の制約があることも指摘している。

- (5) a. *犬のコトがすごく好きなんだ
b. この犬のコトがすごく好きなんだ
- (6) a. お嫁さんを探している
b. *お嫁さんのコトを探している
c. そのお嫁さんのコトを探しているんだ

コトは先行名詞句の属性を意味し、報告文よりも感情表出文において出現しやすく、文末のモダリティを伴うことから心的行為によって要求されるものであり、名詞句におけるモダリティであると主張した。

2.1.2 日高(2006)

東北～北関東方言においては、コト・トコ類が格助詞相当に機能している。以下は茨城県水海道方言の例であり、有生名詞の場合は「-godo」という対格をとるが、無生名詞の場合はゼロ格表示で現れることから、有生対格の存在が指摘されている(佐々木 1998)。

- (7) a. nego-godo budz-u. 猫をぶつ(有生目的語)
b. tskue-φ budz-u. 机をぶつ(無生目的語)
c. *tskue-godo budz-u. 机をぶつ(無生目的語)

日高は一連の研究で、方言研究の観点から共通語におけるノコト目的語の機能について説明を試みており、コトは「内面的属性」を持ち得る名詞（特定の有情名詞）に後接し、感情や動作の対象であることを強調的に示す機能を帯びており、共通語におけるコトは文法化の初期段階にあり格助詞化しつつあると指摘している。

ノコト目的語におけるコトを考えるにあたりこれらの先行研究の主張からは重要な示唆が得られるが、次に述べる問題点が挙げられる。

2.2 先行研究の問題点

コトを前接名詞の「属性」や「内面的属性」であるとした時に、以下のような例においては「属性」では説明できない。また、以下の例は不特定名詞にコトが後接しており反例ともなる (cf. Kurafuji 1988)。

- (8) だれのことも好きになんかなれない！！ (青山えりか「好きから始まる冬物語」)
- (9) 人のことを殴ってはいけない。(作例)

また、コトを介在させることによる解釈の変化は語用論的に決定されるものであって、コト自体が有する本質的な機能ではないと考える。例えば、以下の(10a, b)(11a, b)の例において、どちらがより「感情が込められている」かは、個人の解釈に揺れがあり、感情が込められているか否かを明確な基準に照らして議論する必要がある。

- (10) a. あなたが好きです。
b. あなたのことが好きです。
- (11) a. お前を殺してやる。
b. お前のことを殺してやる。

さらに、(10b)(11b)などからもわかるようにコトは格助詞との相互承接が可能である。日高(2006)では、方言の分析を共通語にも当てはめているが、少なくとも、これらの例を見る限り、共通語に対する「ノコト」自体が格機能を担いつつあるとする主張は首肯しがたい。むしろ、特定の方言の問題として、なぜ「のこと」が目的語の位置に現れ格関係を示しているように見えるのかを明らかにしなければならない。

上に見るとおり、先行研究での主張はこの現象を考える上で重要な指摘は含まれるものの、その妥当性が疑われる問題点もあり、見直す必要がある。以下では、コーパスを用いこの現象を再観察したうえで考察を進めていく。

3. BCCWJ における用例

ノコト目的語およびノコト目的語をとる動詞または形容詞にどのようなものがあるのかを調査するために、『書き言葉均衡コーパスモニター公開データ(2009 年度版)』(以下、BCCWJ)を利用して、対象コーパスを「書籍」に限定し「のこと」で検索した。「書籍」に限定したのは、ノコト目的語は会話文中に多くみられるため、より多くの例を集められると考えたためである。こうして得られた 28114 例のうち、目的語の位置に現れない、例えば文末に現れる「(…は) ~[のこと]だ」や、根拠を表す「…[のこと]だから」といったものを除外した結果、対象となる用例は 5639 例集められた。

各述語の意味的特徴から、述語は「発話・伝達動詞」「記録動詞」「学習動詞」「思考・認識動詞」「感情述語」「X 動詞」のように分類した。各動詞タイプにおける異なり語数は、「発話・伝達動詞」が 89 語、「記録動詞」が 10 語、「学習動詞」が 9 語、「思考・認識動詞」が 68 語、「感情述語」が 58 語、「X 動詞」が 50 語であった。述べ語数で見ると述語は順に 2142 語、236 語、118 語、2255 語、676 語、191 語であった。

【表 1】述語タイプと用例数

| 述語タイプ | 異なり語数 | 述べ語数 | 出現頻度上位 10 位 |
|---------|-----------------|-----------------|---|
| 発話・伝達動詞 | 89 語 (31.3%) | 2142 語 (38%) | 言う、話す、聞く、呼ぶ、指す、語る、教える、伝える、尋ねる、述べる |
| 記録動詞 | 10 語 (3.5%) | 236 語 (4.2%) | 書く、記す、載る、記述する、記録する、記事にする、表記する、描く、記載する、載せる |
| 学習動詞 | 9 語 (3.1%) | 118 語 (2.1%) | 調べる、学ぶ、勉強する、証明する、読む、研究する、習う、 |
| 思考・認識動詞 | 68 語 (23.9%) | 2255 語 (40%) | 知る、思う、思い出す、わかる、覚える、理解する、思い浮かべる、承知する、存じる、振り返る |
| 感情述語 | 58 語 (20.4%) | 676 語 (12%) | 心配だ(心配する)、好き、気になる、気にする、嫌い、愛する、気にかける、気に入る、大事だ(大事にする)、気遣う |
| X 動詞 | 50 語 (17.6%) | 191 語 (3.4%) | 見る、任せる、頼む、守る、かまう、無視する、含む、見つめる、放っておく、目に入る、にらむ |

まず、「発話・伝達動詞」は、ことばを介して情報を伝えたり得たりする動作を表す動詞である。主な例には「話す」「聞く」などが挙げられる。また、「黙る」「内緒にする」のように情報を伝達しないものも含めてある。また、発話・伝達動詞の下位分類としてただ伝達するだけでなく何らかの評価を伴う述語がある。「ほめる」「批評する」などである。

次に「記録動詞」だが、情報を文字化・可視化し記す動詞である。主な例に、「書く」

「記す」などが挙げられる。

「学習動詞」は、知的活動である「調べる」「学ぶ」といった何らかの事象について追及、学習する動作や「読む」といった動作が挙げられる。「思考・認識動詞」は、心的行為を表す動詞である。外界からの刺激を受けそれを心的に捉える働き（思考や認識活動）がこれに当たる。主な例に思考を表す「考える」「思う」や認識を表す「知る」「気づく」などである。

「感情述語」は、プラス・マイナスの感情を表す述語である。主な例には、「好き」「嫌い」といった好悪を表すもの、喜怒哀楽を表すもの、「心配だ」「気にする」のように不安な心情を表す述語が挙げられる。また、「懐かしむ」のように回顧を意味する述語も含むが、これらは思考・認識動詞である「思い出す」「振り返る」とは異なり、主体の主観が加えられているため感情述語として分類した。

「X動詞」には、他動性の低い動詞から高い動詞まで含まれる。ここではこれらの動詞群にあえて特定の名称を与えることなく、X動詞としてひとくくりにしておく。その内実は大まかに「任せる」、「探す」のように動作が直接対象に及ばない＜非接触系＞、「見る」、「探す」のように視覚を表す＜知覚系＞、そして動作が直接対象に及ぶ「抱く」、「殺す」のようなく＜接触系＞に分けられる。他動性の高い＜接触系＞の動詞ほど用例数が少ない。

これらの述語タイプにおいて、コトが必須となるか介在可能かによって分けると、三タイプに分類できる。タイプ1：コトを必須とする述語、タイプ2：コトが介在可能な述語、タイプ3：本来コトをとることのないが、コトが介在可能となる述語である。以下では、これらの述語においてコトがどのように機能しているかを観察していく。

4. 必須のコト

4.1 タイプ1：必須のコトを要求する述語群

上記の用例でみた述語群のうち、基本的にノコト目的語が必須となるものは、発話・伝達動詞、記録動詞、学習動詞、思考・認識動詞である。なお、一部の発話・伝達動詞および思考・認識動詞では介在が可能となる場合がある（タイプ2）。これについては節を改めて考察する。

寺村(1992)では、名詞の特性を「トコロ性」「実質性」「モノ性」「コト性」などに分け、(12)の目的語の位置に現れるためには、「コト性」を持たない名詞（「人」「机」「駅」など）については「～ノコト」を補う必要があると説明している。

(12) —— ヲ考エル（その他の認識、思考を表す動詞）

（寺村 1992）

これらの述語においてコトを補うことは、述語からの要請である。ノコト目的語が受動文の主語位置に来ることができないのに対し、ノコト目的語は受動文の主語位置に移動す

ることができる。同様に、その他の統語的操作を行っても文法性や容認度に影響は生じないということが、分裂文、連体修飾節への変換ができるところからわかる。

(13) 受動文の主語位置

- a. 花子が太郎のことを話している。
- b. 太郎のことが花子に話されている。

(14) 分裂文

- a. 花子が太郎のことを話している。
- b. 花子が話しているのは太郎のことだ。

(15) 連体修飾節

- a. 花子が太郎のことを話している。
- b. [花子が話している[太郎の[こと]]]

4.2 必須のコトの意味・機能

コトは、名詞の性質をどのように変化させるのだろうか。先行研究では、分析の対象はそれぞれ異なるが、それぞれ「コト」の意味について「概念」という共通した用語を用いて考察している。

久野(1973)では、補文標識であるコトとノの違いについて、それぞれが共起する述語の意味特徴から、コトは「抽象化された概念を表す(p.140)」としている。また、寺村(1981)では、実質的な名詞としてのコトの意味をコトの指示対象を観察することによりその意味を、「命題で表される内容や、動詞、形容詞で表される動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表したもの(p.754)」とした。寺村(1981)をうけ、益岡(2003)では「こと」の基本的な特性を「概念的に構築された事態を表すもの」とし、述語に「こと」を付加することは文表現からモダリティ性を剥奪し「命題化」することであるとした。

本稿でも、コトの意味は「抽象化された概念」であり、コトは対象を実体そのものから抽象的な概念体へとその意味を変化させる機能(概念化)を担うと考える。つまり、「太郎」を「太郎のコト」とすることは、存在としての太郎から、太郎についての情報を内在した太郎へと変えることになる。

5. 介在可能なコト

5.1 タイプ2：介在可能なコトをとる述語

介在可能なコトをとる述語には、一部の発話・伝達動詞および一部の思考・認識動詞、そして感情述語、X動詞が挙げられる。

ここで、注目されるのが、タイプ2に分類される一部の発話・伝達動詞と一部の思考・

認識動詞、一部の感情述語である。これらは統語的操作を加えても容認度や文法性に変化がないのに対し、介在が可能な点ではタイプ3の述語群と共通した性質を持つことから、コトからコトへの連続性をつなぐ中間的なものにあたりと考えられる。

一部の発話・伝達動詞は、「ほめる」「批判する」のようになんらかの評価を含むものである。対象について好意や否定的な感情をもって捉えるという点で、感情述語の意味的特性と共通する。思考・認識動詞は、「思い出す」「理解する」のような例においてコトなしの例が見られたが、これらは、X動詞に分類した知覚を表す「見る」「無視する」のようなものと意味的に連続すると考えられる。また、「心配する」「気になる」といった動詞は動作主体の主観的な認識態度を表すという点で感情述語に分類したが、心的行為を表すという点では思考・認識動詞とも性質を共有するものである。

これらの動詞におけるコトの意味・機能としては先に見たコトと同じであることが次のことから確認できる。

受動文の主語位置

- (16) a. 花子は太郎のことを思い出した。
b. 太郎のことが花子に思い出された。
- (17) a. 花子は太郎のことをほめた。
b. 太郎のことが花子にほめられた。
- (18) a. 太郎は花子のことを心配している。
b. 花子のことが太郎に心配されている。

分裂文

- (19) 花子が思い出したのは太郎のことだ。
(20) 花子がほめたのは太郎のことだ。
(21) 花子が心配しているのは太郎のことだ。

連体修飾節

- (22) [花子が思い出した[太郎の[こと]]]
(23) [花子がほめた[太郎の[こと]]]
(24) [花子が心配している[太郎の[こと]]]

では、タイプ2の述語群において、コトが介在可能となるとき、裸名詞句とノコト名詞句ではどのように意味が異なるのであろうか。出現する文脈から両者の違いを思考・認識動詞「思い出す」を例にみてみよう。

裸名詞句の場合では、静止画としての「対象」であると考えられる。(25)の例では、「笑っているひろ子」の静止画が、(26)では「写真に写っている“かあさん”」の静止画が「対象」

として思い出されている。

(25) 豊の笑い顔がひろ子を思い出させる。「豊君、笑うとひろ子ちゃんそっくりだね」
日野に言われた豊はすぐさま反応した。(鴨しれん「グリーンボール」)

(26) 88頁の写真の“かあさん”を思い出してください(杉田昭栄「カラス」)

一方、ノコト名詞句の場合では、「静止画」というよりも「動画」としての「対象」や、「静止画」についての「属性」などが思い出されている。(27)では、「彼の様子」が思い出されており、(28)では、「夏子という女」の「属性」が後続の文で説明されている例である(波線部参照)。

(27) 最近、彼のことがよく思い出されるんです。彼が練習でクラブを振っている様子が一ほら、あそこですよ」リストンは窓の外、人影のないティー・グラウンドを指さした。「ボールを打つ時の彼の様子を見てると…その時はよくーいや、今でもーどこか奇妙な感じがしたものです。あのスイング…あの顔つき…いまだに目に浮かびますよ」(マイケル・マーフィー／山本 光伸「王国のゴルフ」)

(28) 俺は夏子という女のことを思い出した。俺と同年の女で、女子高に通っているやたら元気な奴だ。(星野泰孝「走り出す日」)

タイプ2では、目的語の位置に「静止画」としての対象、または「動画」としての対象の両方をとることが可能である。そのため、コトが介在可能となる。

しかし、ここでみた心的行為を表す「心配する」「気になる」等を除く感情述語やX動詞におけるコトは、これらのコトとは出現環境が異なる。以下では、コトの意味・機能を考察する。

5.2 タイプ3：介在可能なコトの出現環境の制約

5.2.1 意味的制約

先行研究では既に、ノコト目的語に前接する名詞の意味特性が指摘されている。しかし、コトに先行する名詞句において特に重要な制約は、「特定性」ではなく「有生性」一さらに言えば、「有情性」であると考えられる。

まず、特定性について考察する。コトが介在することにより、以下の例においては名詞句の解釈が異なる(笹栗 1999)。

(29) a. お嫁さんを探している。

- b. *お嫁さんのコトを探している。
- c. そのお嫁さんのコトを探しているんだ。

(笹栗 1999、例文(6)再掲)

「探す」という動詞から「お嫁さん」という名詞句には「(今は存在しない) 将来のお嫁さん」と「(存在する) 特定のお嫁さん」という意味が想定できる。前者の解釈の場合、(19a)は「嫁探し」といういわば事態読みになる。一方、「お嫁さんのコト」とした(19b)(19c)ではこの解釈はできない。そこで、「その」を補い、「お嫁さん」に該当する特定の人物を探すという解釈が明確となる(19c)の方が(19b)より許容度が上がると考えられる。(19a)の事態読みの解釈が生まれるのは、「お嫁さん」という名詞句の特殊性にあると考えられる。つまり、「探す」という述語のときに、名詞句が「値」読みか「役割」読みのどちらが優先されるかということである。以下の(20a)では、役割読みが優先されるが、(20b)ではコトの付与によっても値読みの解釈しかされない。

- (30) a. お嫁さん、先生、アルバイト、学生
- b. 父親、妻、夫、固有名詞

しかし、(29b)(29c)に事態読みの解釈が何故出ないかについては、確かに名詞句の「特定性」と関連させてさらに考える必要がある。

一方で、名詞の特定性には次のような反例が挙げられる。「誰」「誰か」のような不定語であってもコトの介在は可能である。

- (31) 「…兄哥、誰のことをお探してでしょうか？」(立原とうや「受胎狂詩」)
- (32) 誰のことを殺したの？(作例)

一方、有生性の制約についてはこのような反例はなく、コトは以下のように無生名詞に後接することはない。

- (33) 士官に借りた双眼鏡で陸地(φ/*のこと)を見ていた八郎がいった。
(中村彰彦「遊撃隊始末」)
- (34) ありがたいことに中国人はカラオケ(φ/*のこと)が好きようだ。
(樋口修吉「国別・外人接待法」)

また、不特定のモノを意味する「何」は次のようにいうことができない。

- (35) (*何のこと／誰のこと)を探しているの。

以上のことから、ノコト目的語に前接する名詞には特定性よりも有生性が強くかかわっていると言える。しかし、笹栗(1999)では、次のように有生性の反例となるような例を挙げている。

(36) 彼らはこの研究室のことをすごく憎んでいたから (村上)

(37) だからほんとうのことを言えば、この発電所のことも好きなんです (村上)

(用例は笹栗(1999)より引用、下線部筆者)

「研究室」や「発電所」のようなものは、それ自体は場所名詞であるが、人の集団として有情性を読み込むことが可能である。このことから、名詞の意味的な制約は有生性よりも、有生でありさらに意思を持っているとみなせる有情性がコトの介在に大きく関わっていることがわかる。

5.2.2 統語的制約

ノコト目的語は名詞の意味的制約に加え、統語的にも強い制約を示す。以下ではコトが介在可能となるタイプ3の述語である感情述語「好き」、X動詞「殺す」において受動文、連体修飾節、分裂文に見られる特徴を見ていく。

5.2.2.1 受動文の主語位置

ノコト目的語は受動文の主語の位置に現れない。そして、(40)(41)からみてわかるように対格以外の位置に現れることもない。

(38) *花子のことが太郎に好かれている。

(39) *花子のことが太郎に殺された。

(40) *太郎が花子のコトに恋している。(笹栗 1999)

(41) *田中は山田のことに会った。(田窪 2010)

5.2.2.2 分裂文

分裂文の焦点部分にもノコト目的語は移動することができない。

(42) ??*太郎が好きなのは花子のことだ。

(43) *太郎が殺したのは花子のことだ。

連体修飾節や分裂文への書き換えができないところから、タイプ3の述語がとるノコト

目的語は、意味的主要部はコトではなく、あくまでも先行名詞句であるということがわかる。

5.2.2.3 連体修飾節

連体修飾節へ転換する際、ノコト目的語そのままでは底名詞とはならない。以下の例においてコトを主要部(head)とする底名詞とはならず、異なる解釈が生じるためそれぞれ「太郎が好きな花子」、「太郎が殺した花子」と同義とならない。

- (44) 太郎は花子のことが好きだ。
[太郎が好きな[花子の[こと]]]
- (45) 太郎が花子ノコトを殺した。
[太郎が殺した[花子の[こと]]]

6. 介在可能なコトの意味・機能

ここまで、コトの出現環境について、意味的制約そして統語的制約の点から観察してきた。以下に、これまでの観察をまとめる。

- I. 介在可能なコトは先行名詞句について「特定性」よりも「有生性」の制約を強く示す。また、場所名詞をとれることから、更に「有情性」の制約が働いていると考える。
- II. 基本的に表層上の目的語の位置にしか現れない (cf. 笹栗 1999、田窪 2010)。

必須のコトと、介在可能なコトの中間に位置する述語群として、5.1 節ではタイプ2の述語である、評価をとまなう発話・伝達動詞や、一部の思考・認識動詞、一部の感情述語について確認した。

まず、感情述語のコトの意味・機能は、思考・認識動詞におけるコトの意味・機能と同じであると考えられる。つまり、感情述語は「実体そのものとしての対象」もしくは、「概念としての対象」の二つの目的語をとることが可能である。そして、後者の場合、介在するコトは対象を概念化している。

一方で、X 動詞群におけるコトは、動作が実際の対象に直接及ぶものもあるため、感情述語のコトとは別の機能を担っているということが考えられる。上述の I および II から考えて、コトは有生性である目的語の位置にしか現れないことから、先行名詞句の「非有生性」をその機能として担っていると考えられることができる。

通常、典型的な他動詞文は有生名詞主語の無生名詞目的語への意思的な働きかけを表すのが典型的で安定した文である。そのため、目的語の位置に有生性や特定性の高いものがかかるのは有標となる。コトは、有生名詞目的語を非有生性化することによって、典型的でより安定した他動詞文へと当該の文を変化させることに寄与しているといえる。

この見方と反対に、コトが非有生化ではなく、有生性を示すマーカーであると考えられることもできる。実際に、日本語における方言研究ではそのような見方がされている（佐々木 1998、日高 2006）。しかし、そう考えると、本稿で見てきた発話・伝達動詞、記録動詞、学習動詞、思考・認識動詞から感情述語、X 動詞への連続性を説明できなくなってしまう。必須のコトは、名詞句の有生・無生の如何に関わらずに現れる。コトを付与することによって、名詞句の有生性についてニュートラルな状態にすると考えれば、形式名詞コトの意味変化として一連の連続性を捉えることが可能となる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、必須のコトから介在可能なコトへの連続性を捉えることを目的としてきた。これまでの観察をまとめると、表 2 のようになる。

【表 2】 必須のコトから介在可能なコトへの連続性

| 述語タイプ | | コト | 目的語の意味 | | 前接名詞 |
|-------|-----------------------|-----|--------|----|----------------|
| | | | 概念 | 対象 | 有生性 |
| タイプ 1 | 発話・伝達動詞 (例：言う) | 必須 | 概念 | | ± |
| | 記録動詞 (例：書く) | | | | |
| | 学習動詞 (例：調べる) | | | | |
| | 思考・認識動詞 (例：知る) | | | | |
| タイプ 2 | 思考・認識動詞 (例：思い出す) | 介在可 | 概念 | 対象 | ± |
| | 発話・伝達動詞+評価 (例：ほめる) | | | | |
| | 感情述語 (例：心配だ) | | | | |
| タイプ 3 | 感情述語 (例：好きだ) | 介在可 | 概念 | 対象 | ± ¹ |
| | X 動詞 (例：見る) | | | | |

¹ 無生名詞は場所名詞などが多く、有生名詞をとることの方が自然である。

例) 筑波大学のコトが好き。会社のコトが好き。

*本のコトが好き。*お茶のコトが好き。

本研究では、先行研究における問題点を指摘したうえで現象の観察を見なおし、以下のことを主張した。

- I. 介在可能なコトは先行名詞句について「特定性」よりも「有生性」の制約を強く示す。また、場所名詞をとれることから、更に「有情性」の制約が働いている。
- II. 基本的に表層上の目的語の位置にしか現れない (cf. 笹栗 1999、田窪 2010)。
- III. I, II より介在可能なコトの機能は有生名詞目的語の「非有生化」が主たる機能である。

ただし、感情述語におけるコトは、発話・伝達動詞や思考・認識動詞におけるコトと意味・機能を同じくする。上記のIIIの主張が当てはまるのは、本稿で X 動詞としてまとめた動詞群についてである。

今回は、笹栗(1999)で挙げられた、コトと名詞句の特定性との関係が明らかにすることができなかった。また、コトが「概念」を表すとしたが、その概念とは具体的に何なのかというのを考えるに至らなかった。いずれも今後の課題としたい。

【参考文献】

- 金河守(1994)「日本語の形式名詞「こと」の機能—目的格の名詞句に出現する形式名詞「こと」を中心に—」『言語学論叢』13; 1-10 筑波大学
- コムリー、バーナード(1992)松本克己・山本秀樹(訳)『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房
- 佐々木冠(1998)「二重対格構文とヲ格重複制約—水海道方言を例に」『言語』27-7
- 笹栗淳子(1996)「現代日本語における「名詞のコト」の分析—2つの用法と「コト」の統語的位置—」『九大言語学研究室報告』17; 37-46
- (1999)「名詞句のモダリティとしてのコト」アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育』161-176, くろしお出版
- 笹栗淳子・金城由美子・田窪行則(1999)「心的行為における認識主体と対象との関係」『日本認知科学会』(<http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/kaken/kiban15a/papers/skt-jcss99.pdf>)
- 田窪行則(2010)「日本語における個体タイプ上昇の顕在的な標識」『日本語の構造—推論と知識管理—』くろしお出版 (Takubo, Yukinori (2007) An overt marker for individual sublimation in Japanese. Current Issues in the History and Structure of Japanese 135-151; Kuroshio-shuppan.)
- 寺村秀夫(1981)「『モノ』と『コト』」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』743-763, 大修館書店
- (1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- (1992)『寺村秀夫論文集I—日本語文法編—』くろしお出版
- 日高水穂(2005)「方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—」『日本語の研究』1-3; 77-92.

—— (2006) 「のこと」の機能—話しことばにおける新しい格表示— 『日本語文法の新地平
(形態論・文核編)』 83-101, くろしお出版

Comrie, Bernard (1979) Definite and Animate Direct Object: A Natural Class. *Linguistica
Silesiana* 3; 13-21.

Kurafuji, Takeo (1998) Definiteness of Koto in Jaoanese and Its Nullification. *Ruling
Papers* 1; 169-184; Working Papers from Rutgers University.

【使用コーパス】

『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ』 2009 年度版